

海國兵談 第二卷

陸戰

既に水戰を會得しては陸戰の法を呑込むべし、先づ戰法とは戰鬪の法組なり、日本諸流の戰法は大概法組極りて鐵砲、弓、長柄武者の四段に立て六十間より三十間程まで鐵砲にて持合、夫より十五間に詰るまで弓持合、夫より長柄の持合にて鼻突になりて、其處で武者の勝負と切組、大概定りあるなり、當時は世人多くは此切組の外合戰の次第なき事と思ふ人も多けれども、接戰の懸り口、是のみに限りたる事ならねば切組と違ひたる敵に出會へは、大に狼狽する事あるべし、總て軍は先を取るにあり、先を取る事は人の膽を奪ふにあり、其法六つあり、下に記す、異國勢の備を碎くにも猶此術を施すべし。

敵、當世の備立にて楯を用ゐず、押來る時は兩懸りか手詰懸りに宜し、又楯を用ゐ、弓鐵砲を嚴しく備て押懸らば玉碎きに如くはなし、又敵楯を用ゐず、鐵砲のみ數千挺にて押懸らば、指矢懸によろし、又飛道具を夥しく備へて押懸る時、味方に飛道具も

多からず、楯もなく其上無勢なる時は乗崩すに如くはなし、又何れの備をも押崩す車懸りの法あり、但し平場にのみ用ゆるなり。

兩懸りと云ふは楯を一面に突立て、其陰に弓、鐵砲を等分に組合せ、鐵砲を少し打懸乍ら押詰て敵間十四五間になりたる時鐵砲を一つるべに打懸け、弓は矢接き早に二筋つゝ射懸て、敵を射しらましひるむ所を足輕の後ろに控へたる武士、持道具を打振て前後を顧みず踏込み踏込み切立つべし、弓、鐵砲の足輕も皆其持道具を柵枠に懸け、武者に續いて切込なり、是を兩懸りと云ふは、弓、鐵砲の兩懸りと云ふ心なり。手詰懸りと云ふは、是も楯を一面に突並べて膽氣壯に、力量ある者二三十人、六七十人乃至二三百人も撰て、各大太刀、大棒、大薙刀等を持たせ置き、敵間三十間許になりたる時、楯持、足を早めて無二無三に敵間三四間に押付て足を踏み留めたる時、楯の陰より件の壯士少人数ならば一口、大人數ならば二口にも三口にも成りて、剛氣無慚に敵の中へ割て入り、縦横無碍に切り立つべし、後勢是に續いて驅立るなり、これ味方飛道具なき時の懸り口に殊に宜しと云へり。玉碎と云ふは楯を一面に突並べ飛道具に大砲を雜へて備置き、小銃を四度路に打懸けなから敵間十四五間に押詰べし、此時在合ふ大砲を一つるべに發し懸て敵の

膽を冷したる所へ、小銃を一齊に打懸て、彌々敵のひるむ所へ、烟の下より武者も足輕も無二無三に切込で、乗越えて進む時は、敵を破る事疑なし、扱て飛道具の數は人数の多寡に隨ふべし、大砲は鐵砲筒鉛玉は重くして取廻不自由なり、此は短町の場にて敵隊を碎くまでの事なれば、木筒煉玉を用ゆべし、是輕くして便利なり、製法は器械の卷に出せり、見合すべし。

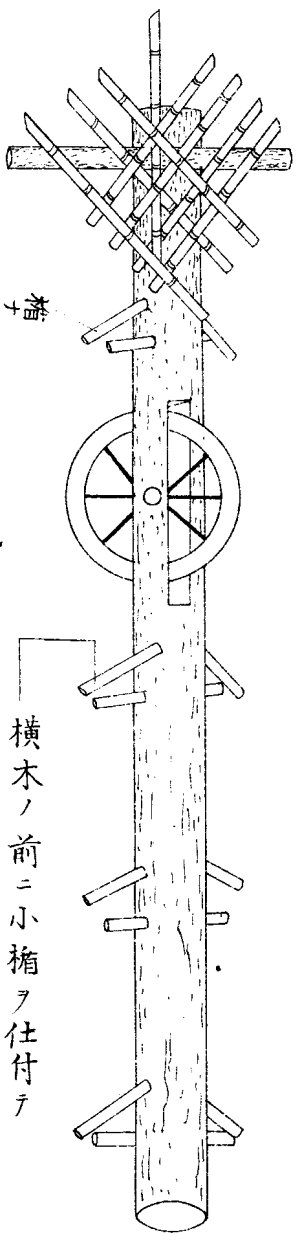
指矢懸りと云ふは、敵鐵砲を夥しく先に立て押懸り、味方を打すくむるならば、此方には射手數百人揃て矢種を惜まず、指矢に射懸敵を射すくめて、鐵砲を放たしむる事なかれ、其時左右より横を入れて破るべし、此指矢懸りは弓家第一の働にして鐵砲打は、面も振向難き懸り口なりと聞傳へり。

乗崩と云ふは敵飛道具を夥しく備て透間もなく押懸る時、味方に飛道具不足なるか又小人數なる時は尋常の如く軍しては必ず打負るものなり、其時は乗崩に如くはなし、其法強き馬を前に立て二三十騎又は五六十騎乃至百騎二百騎なりとも君の大事此一戦にありと、命を塵芥よりも輕んじ、忠義に一念に軍神を勸請し奉て、前後を顧みず、無二無三に敵の隊中へ乗込むべし、是に續いて歩兵も切込むなり、馬の入り様三等あり左に記す。

騎馬の三十も、五十も一隊と成て、敵隊の真中へ乗込なり、是を一口入と云ひ、又二隊に分れて備の兩端より乗込あり、是を二口入と云ひ、又二隊に分れて一隊は敵の正面へ乗込み、一隊は敵の脇へ乗廻して横合より乗込あり、是を廻し入と云ふなり、右何れも馬を入るには、人數の厚き方へ乗廻すべし、薄き方へ乗廻す時は打殺さるゝものなりと云へり。

車懸りと云ふは、下に圖する所の獨輪の長車を拵へて、一車をは人にて推すなり、此車を備に應じて、十車或は二三十車も拵へて陣前に推出し、敵間十間許に詰るまでは静に進むべし、扱て太鼓の相圖に隨て無二無三に敵の隊中へ推込べし、人をも馬をも押倒すなり、夫に續いて武者切込むときは勝を取る事疑なし、尤も此事の推方は能く操練あるべし。

竹鐘ヲ乱散ニ結付ル之



木ノ長サ三間

横木ノ前ニ小楯ヲ仕付テ
推人ニ矢石ヲ防カシム

此車ヲ推スニハ
足輕百姓等ノ
勇者ヲ揆用ヘシ

無輪ハ四尺斗ニ作ル
竹ハ一尺八寸ニ
結付シ

敵より馬入をする時は早く場中へ出向て馬の前足を薙べし、此方の備へ乗廻られては、必ず崩れ附ものなりと知るべし。

敵長柄を夥しく備て押來らば、先づ射手を進めて散々に射立へし、射立られて、ひるむ所へ、武士拔連れて無二無三に飛入るべし、手詰の勝負は長柄の不得手なるもの故必ず破るるなり。

右の外異國にて車戰とて、車を四馬に牽かせて、車の上をば生牛皮を以て張り堅め、其中に十人許載せて、敵陣へ馳込むなり、夫に續いて騎馬も歩卒も突懸て敵を破る術あり又、「グレイキスブック」に小家の様に拵へて、四方を生牛皮を以て張り固めたるものを象の背の上に負せて、其中に戰士二十五人を載せて、内一人象遣ひなり、敵陣へ馳込む術あり、斯様の事は將帥の機轉次第土地と人數とを能く計りて製作して用ゆべし、兎角合戰の道は世間になき形を工夫して勝を取ること肝要なり 徂徠先生

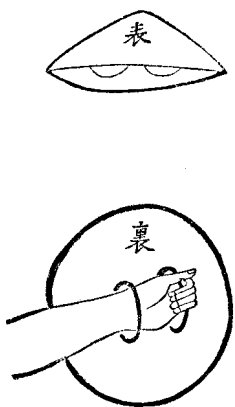
も要々此意を述べたり

敵と戰陣して戰を決せんと思ふ時は、先づ戰地を見立へし、地形は戰の助なれば疎にする事なかれ、地形の事は九卷目に記す。

備を押出すには必卒爾にする事なかれ、隨分四方へ物見を遣し、碍りなきを知て後

に押出すべし。

近世楯を用ゆる者少なし、是一向に力戦のみを合戦の主意と心得るより楯などを用ゆるは迂遠の事の様に思ひて、合戦の仕形古より輕薄になりたるが故なり、其上近世は銃砲流布して合戦の次第銃砲無き前より一際ひどく成りたるなり、是に付ても楯を用ゆべき事良將の戦法なれば、楯をば再興あるべきとなり、楮楯をば百姓商人等の壯者に持たしむべし、此役目は只楯を以て前陣に立までにて、合戦に携はる事なければ、百姓町人等を用ゐて異議無き事なるべし、又一枚楯に穴を穿ち、銃砲を貫いて、直に鐵砲足輕の持もあり、又唐山和蘭の戦法に生牛皮を以て笠の形に拵へたる、楯を戰士毎に持たするなり、是には稽古手練のある由なり、其圖は左に出す、此外楯の製作様々あり、器械の卷にあり。



唐に藤牌と言ひ、和蘭に「シケルト」と言ふ、左の手に是を持て面を防ぎ、右の手に劍を持て敵に當るなり。

近世大砲出來して種々の奇術ありと云へども、只城攻か、籠城にのみ用ゐて、放戦に用ゆる事を知らざるなり、兵を携ふる者、工夫して大砲を放戦に用ゆるは、手ひごき軍立なるべし、工夫を加ふへし。

双方人數を押出す時は、初めに物見を出して能く敵の様子を見切り、懸り口の了簡を定めて人數を押出すべし、扱て敵間五六町に成る迄は平生の足にて押行き、四町許に成りて鉦を鳴らし、人數を止めて居敷せしめ、新たに太鼓を打て、人數を進むべし、其法太鼓一聲に一步づつ進むべし、武間詰る程愈々此方を嚴にすべし、然らざれば正整せざるなり。

敵を踏破て逃るを追ふ事、一町半二町にて追止まるべし、追行く時、備を亂し、足を亂して馳駈する事なかれ、左右を見合せ見合せ追行くべし、書經に不愆千六步七步乃至齊焉、不愆千四伐五伐六伐七伐乃至齊焉、と云ふも聖人の軍法にして長追を禁じたる事なり、尤も鉦鳴らさば速に足を止むべし、止らざる者は罪す。

長追を禁ずる事は敵必死になりて取て返し、死物狂の働きをする時は、却て手に餘る事あるものなればなり、然りと雖も何國迄も追詰て根を絶ち、葉を枯らす見切ある時は、鼓躁して追詰むべし、義興、太閤、西涼州の馬超か働など見て知るべし。

逃るを追ふに心得あり、旗旌整ひ、足並も亂れず、士卒後勢を顧み顧み逃るは眞の敗走にあらず空逃なり、追ふ事なかれ、妄りに追へば伏か、大返しに逢て却て敗軍する事あり、慎むべし、又旗旌も亂れ、足並も正しからず、兵器など取捨るは眞の敗走なり、追詰て打果すべし。

突懸り強き敵をば已れ空敗して或は伏を設け、或は大返しにして討果す事あり、然りと雖、敵將心得ある人なれば、空敗逃の手に乗らざるものなり、然る故に空敗の仕様あり、旗旌を亂し、兵器を捨て、高足して走るべし、敵將智ある故、却て此手に乗る事あり、總て此類の事は將才の活潑にあるべし。

已れ空敗する時は其相圖には旌印等を伏せては起し、起しては伏せながら、走るべし、尤も兼ての操練に此約束能々教ゆべし。

實に逃ると耻とのみ思へるは戦の道に暗き故なり、勝負は時の運によるものなれば、名將と雖負る事もあるものなり、其時守返す見詰なき時は、逸足出して逃る事もあるなり、總して名將の逃るは其逃様甚だ上手なるものなり、漢の高祖や、尊氏卿の逃様を見て知るべし、然りと雖逃る事を心懸けよと教ゆるにはあらず、時有りて上手に逃げよと云ふ事なり。

敵を追放しては其手の侍大將、番頭、旗馬印を其所に建定めて人數を纏めしめ、手負死人を調へ、功の淺深を吟味して悉く記録し、主將の上覽に入るべし。

敵を破りたる侍大將、番頭へは時宜に依りて即時に感狀を賜はる事あり、又將士共に祿を給ふ事もあるなり。

敵を破りて眞に味方の勝利に於ては旗本にて五々三の貝を吹立て、勝鬨を揚ぐべし、是れ軍神を祭る心にて、且つ軍の勢を添ふる術なり。

手負には介抱人を添へ、藥を賜ひ、討死は子弟なくとも母、妻女等へ諸式相違なく申渡し、嗣子は後日に公より定むべし。

先手敵に追立てられんとして進み兼ねる時は、早く二の見より横に入るべし、是即ち奇正の術なり、既に追崩されて足を亂したる時、入れては守返し難きものなりと云へり、又先手の崩れ色を見て早く横合より馬を入れるもよし、何れに此方より横を入れるべく見る時は、敵の二の見も押出して相手組ものなり、其時は敵の二の見へ目を懸けず、味方の一の手と、相手組み敵の先手の備裏を第一に蹴立べし、總て斯様の働きは心ききて神速になすべし。

先手、二の見ともに追立られて旗本へ崩し懸る時は、旗本の楯を一面につきならべ

楯の蔭より長柄を筋違に半は指出し、石突を土へ突止め、其身は居敷を嚴しく固め崩懸る味方を、一人も旗本へ受入る事なく、速に其隙に右備は右より廻り、左備は左より廻りて挟み討つべし、又右の如くなるときは、味方の前遊軍早く一方へ駆込て越働コシハヌラキをなすべし、越働の仕様は味方を追來る敵の先手をば目に掛けず、敵の旗本へ無二無三に突懸りて必死の一戦を遂べし、此働は電光の如くすべし、如此する時は却て味方の勝利となるなり、疑ふ事なかれ、何れも機轉と武勇とにありと知るべし。

敵より此方へ越働を仕懸時は、早く其の様子を見切り、一二の敵は初の如く敵に當り、左右の備の中何れなりとも、近き方越働の敵に當るべし、勿論遊軍か又は旗本の人數を少しわくるかして越働の敵へ横を入れるべし。

川を渡る敵は半渡を討つべし、半渡とは勢半分ほど川へ入りたる時を言ふなり。押來る敵を待受て討に六の謀あり、一には伏を用て討、二には中途へ出向て討、三には屯場へ着て未だ列をなさざる所を討、四には兵糧を遣はさざる所を討、五には折着の夜を討、六には着陣の翌朝未明に討つべし。是待軍の大法なり。

待軍には味方の屯場にも虎落を二重も、三重も振置き鐵砲、大筒、弩弓等を備へて待つべし。

田單火牛を用ゐ、韓信囊沙の計をなす、李靖艾葉に火を付て諸鳥の足に結付、追放して敵の營を焼く、左傳に虎の作物を陣前に押出して、敵の馬を驚かして破りたる事もあり、此類の事は兒戯に似たれども、其功甚大なり、才覺次第製作すべし。

時宜によりて小荷駄車を直先に推出し、車の蔭より弓、鐵砲にて打すくむる事もあるべし、敵押來るとも隔られて進み得ざるなり、其時味方の宜しき沙合を見て無二無三に切立る時は、敵を破る事疑なしと言へり、總て此類の事猶幾許もあるべし、吳人は不龜手チカカテの薬を製作して、冬の水戦に利を得たる事もあり、皆良將一時の謀才より出る事と知るべし。

何れの戰場へも近習、小性等の中より監軍とて二人を一組となし、二組も三組も遣して、其日の合戦の次第又は諸軍の剛臆共に記録して大將へ上るなり、是は頭々より申上る趣と附合するかを見合するため又は諸軍士己れか頭の外に監軍ありと思へば、一入油斷なく戦に身を入れるものなれば、彼是のために用ふなり。